2019/09/15

**鴎外への疑問**

人生を四分の三世紀を経過する頃から

様々な経験の中で、その時々の疑問や不条理感が

よみがえり、疑念が再燃する。

最近、図書館で

岩波の「森鴎外全集」の分厚い横並びが目につき

中学生の頃に抱いた

文豪とされる鴎外への疑問がふつふつと。

短文なので疑問だった箇所は容易に検索可能。

タイトルは「最後の一句」

大阪の運搬船稼業の桂屋太郎兵衛が

秋田からの搬送米の代金を横領した廉で

斬首刑に処せられることに。

利発な十六歳の娘いちが妹や弟に事情を話し

父親の助命嘆願をお上へ決死の覚悟で決行し

奉行所の白州での詰問の最終場面で・・・・・

原文を引くと、

*「お上の事には間違はございますまいから」と言ひ足した。*

 *佐佐の顏には、不意打に逢つたやうな、*

*驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて、*

*險しくなつた目が、いちの面に注がれた。*

*憎惡を帶びた驚異の目とでも云はうか。*

*しかし佐佐は何も言はなかつた。
次いで佐佐は何やら取調役にささやいたが、*

*間もなく取調役が町年寄に、*

*「御用が濟んだから、引き取れ」と言ひ渡した。
白洲を下がる子供等を見送つて、*

*佐佐は太田と稻垣とに向いて、*

*「生先の恐ろしいものでござりますな」と云つた。*

*心の中には、哀な孝行娘の影も殘らず、*

*人に教俊せられた、おろかな子供の影も殘らず、*

*只氷のやうに冷かに、刃のやうに鋭い、*

*いちの最後の詞の最後の一句が反響してゐるのである。*

*元文頃の徳川家の役人は、*

***固より「マルチリウム」といふ洋語も知らず、***

***又當時の辭書には獻身と云ふ譯語もなかつたので、***

***人間の精神に、老若男女の別なく、***

***罪人太郎兵衞の娘に現れたやうな作用があることを、***

***知らなかつたのは無理もない。***

*しかし獻身の中に潜む反抗の鋒は、*

*いちと語を交へた佐佐のみではなく、*

*書院にゐた役人一同の胸をも刺した。*

ドラマチックである。

１．太い朱線の部分は、全くの余計な挿入文であり

　　生涯

読者は会えもしない洋語を披露する文豪の度胸に遭遇。

しかも、読めば読むほど支離滅裂で

当時の読者は、「欧風」という武器で

巧みに論理性から鴎外に疎外され

　　しかも、当時の知識人読者は知識人作家からの

その行為を有難く甘受したようだ。

ここに、お上と下々の再演が

土俵の上（主文、つまり作品の状況部分）と

土俵の外（作品に埋め込んだ鴎外の主張部分）で進行する

類まれなる作品である。

　　鴎外がお上になり、読者が下々にもなる。

２．マルティリウムは語尾「ウム」が示すように

　　場所や建物であり、献身に**直結**しない。

３．「最後の一句」の一句

*「お上の事には間違はございますまいから」*は

文法上は、「節」であり、「句」ではない。

　　ただし、「最後の節」とは正しくても、言わない。

　　原文にもあるように、タイトルとすべきは

「最後の詞」なのである。

また、いちには、俳諧の心得があるとは思われず

「句」との関連性はないと思うのが自然。

４．*元文頃の徳川家の役人は*

　　奉行所関係者や登場者は徳川家ではない。

５．洋語で権威づけの手法

　　彼の「[鴎外漁史とは誰ぞ](https://www.aozorashoin.com/title/45270)」の作品。

　　*予は我読書癖の旧に依るがために、*

*欧羅巴の新しい作と評とを読んで居る。*

*予は近くは独逸の*

*ゲルハルト・ハウプトマンの沈鐘を読んだ。*

*そして予はこの好処の我を動かすことが、*

*昔前人の好著を読んだ時と違わぬことを知った。*

*鴎外は殺されても、予は決して死んでは居ない。*

*予は敢えて言う。*

*希臘語に「エピゴノイ」ということがある。*

*猶此に末流と云うがごとしだ。*

*新文学士諸家も、*

*これと袂を聯て文壇に立っている宙外等の諸家も、*

*「エピゴノイ」たることを免れない。*

*今の文壇は露伴等の時代に比すれば、*

*末流時代の文壇だというのだ。*以下、省略

　　「予は敢えて言う」と書く以上、

　　「末流時代の文壇だというのだ」とせず、

　　「末流時代の文壇だと言いたい」とし、

　　「いうのだ」の伝聞調の他者巻き込みをやめ、

　　自己主張を明確にするのが、

ドイツで教育を受けた者の務めである。

森鴎外は独逸留学し、軍医総監も経て、

数々の小説も記した明治・大正期の逸材である。

昨年１２月、六甲１５へ「石見・長門・豊前紀行」投稿。

いつか訪れたい鴎外の生誕地「津和野」へ。

今も、山間に歴史的町並みも温存する。

吉井